



Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録(2017.9) 平成28年度:54-56.

長期間NICUに入院している子どもの母親が搾乳を継続するにあたっての
思い

林 遥香, 大橋 美咲, 佐久間 香歩

長期間 NICU に入院している子どもの母親が搾乳を継続するにあたっての思い

旭川医科大学病院 周産母子センター NICU

○林遥香 大橋美咲 佐久間香歩

【目的】子どもの疾患や早産での出生に関わらず、NICUに1か月以上入院していた子どもの母親に搾乳を継続するにあたっての思いを明らかにする。【方法】無記名自記式、自由記述式の質問紙法とした。尚、分析は自由記述の意味内容の同質性に基づいてカテゴリー化した。

【結果】41名にアンケートを配布し、回収率は46.3%である。アンケート結果より、母親の搾乳について感じた思いに関する49のコード、16のサブカテゴリー、4のカテゴリーが得られた。【考察】母乳を子どもに与えたいという願望や母乳を子どもに与える喜び、子どもの成長を実感することが搾乳を継続する励みになっていた。また、子どもが傍にいないときには自宅で子どもの写真やビデオを見るなどの工夫を行

い、子どもを想うことで得た原動力で搾乳を維持する努力をしていた。一方で、長期間の搾乳では母乳分泌減少への不安を感じ、少しでも長く・多く母乳を飲んで欲しいという思いと、母乳分泌低下の現状に葛藤し、搾乳が辛いという思いへと繋がっていた。母親は母乳の分泌が低下した時に、医師や看護師からの声掛けが搾乳を継続する励みになっていた。そのため、母乳の分泌が減少し始めた時期に母親に搾乳の不安や悩みを聞き、励ましや労いの言葉をかけることが重要である。また、搾乳により疲労を感じている時に母親の思いを理解し、労わりの声掛けや、頑張りを認める声掛けを行うことが、精神的負担の軽減に繋がっていた。

長期間NICUに入院している子どもの母親が 搾乳を継続するにあたっての思い

旭川医科大学病院周産母子センター NICU
○林 遥香 大橋 美咲佐久間 香歩

はじめに

私達はNICUに入院している子どもの母親から、「短期間の搾乳なら頑張れるけど、毎日3～4時間毎に長期間搾乳を行うことは疲れる」という発言を聞き、子どもの明確な退院日が決定していない、あるいは直接授乳開始の見通しがついていない状況で、搾乳を継続することは精神的負担や困難があるのではないかと感じた。先行研究では、超低生体重児の母親を対象とし、長期間搾乳を継続する中での思いを明らかにしていた。

目的

本研究では子どもの疾患や早産での出産に関わらずNICUに入院している子どもの母親が搾乳を継続するにあたっての思いを明らかにする。

方法

- 1.研究対象・アンケート調査期間：平成26年1月1日～平成27年8月31日までの期間に子どもがNICUに入院し、1ヶ月以上搾乳を行った経験のある母親全41名を対象とし、平成27年9月～10月の期間でアンケートを回収した。
- 2.調査方法：無記名自由記述式の質問紙法とし、説明文書及び質問紙を送付し、郵送法をもって質問紙を回収した。
- 3.データ分析方法：自由記述の意味内容の同質性に基づきカテゴリー化した。
- 4.倫理的配慮：個人が特定されないよう配慮した上で研究結果を関連学会に発表することを記載した文書を郵送した。質問紙の記入及び返送をもって研究の同意が得られたものとした。

結果1

- 1.アンケート回収率：回収は19名(回収率は46.3%、有効回答率は100%)。
- 2.アンケート結果：母親の搾乳について感じた思いに関する49個のコード、12個のサブカテゴリー、4個のカテゴリーが得られた。

結果2 カテゴリー：子どもに対する思い

サブカテゴリー	コード
母乳を子どもに与えたいという願望	「少しでも多く母乳を飲ませてあげたいと思うようになった」 「少しでも長く飲んでほしいと思うようになり搾乳を頑張ろうと思った」
子どもの成長を実感	「娘のがんばっている姿を見るととても励みになった」 「毎日飲む量が増えて成長していくわが子の姿が励みになった」
母乳を子どもに与える喜び	「自分の搾乳した母乳を注入や母乳綿棒であげることが励みになった」 「とにかく子どもに母乳を与えることが励みになった」
母子分離に対する孤独感	「夜中の搾乳は子どもと離れているので孤独を感じる」 「赤ちゃんが側にいないので夜中の搾乳は何度もくじけそうになった」

結果3 カテゴリー：搾乳に対する思い

サブカテゴリー	コード
夜間の搾乳への苦勞	「睡眠時間が削れることに苦勞を感じた」 「夜中に起きるのが辛い」
搾乳場所や時間の確保が困難	「同僚がいると3時間毎の搾乳が困難な時があった」 「搾乳器が使えなかったり、搾乳場所に困った」
母乳分泌低下への不安	「すぐに母乳がでなくなるかもと不安だった」 「搾乳量が減ったことで残念な気持ちになった」

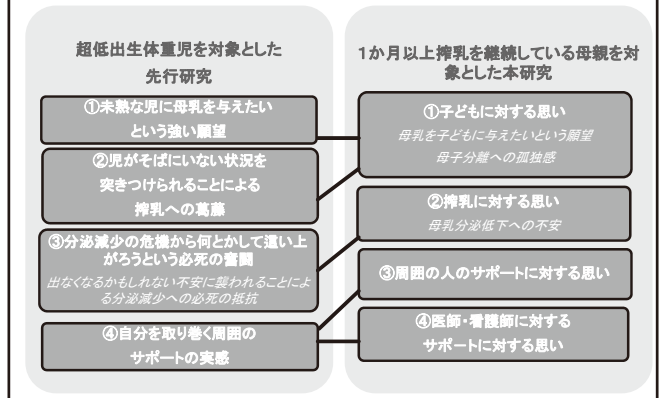
結果4 カテゴリー：周囲の人のサポートに対する思い

サブカテゴリー	コード
医療者以外のサポートを実感	「家族からの声掛け」 「子どもの友達や周囲の人に理解してもらった」 「家族が搾乳しやすいスペースを作ってくれた(車内や外出時)」

結果5 カテゴリー:医師・看護師のサポートに対する思い

サブカテゴリー	コード
落ち込んだ時に医師や看護師からの声かけで救われた思い	「量が減って完母じゃなくなってしまい残念な気持ちになってしまった時に優しい声かけがすごくありがたかった」
医師や看護師からの気遣い・頑張りを認める関わりに支えられた	「母の休息も大事だという労いの言葉」「お母さん頑張っていますねと言葉をかけてもらった」
看護師から受けた母乳分泌を維持するための支援に対する感謝	「どうすれば長期で母乳を続けられるのかアドバイスをもらったこと」「子どもにとっての母乳の大切さ、必要性を教えてもらった」

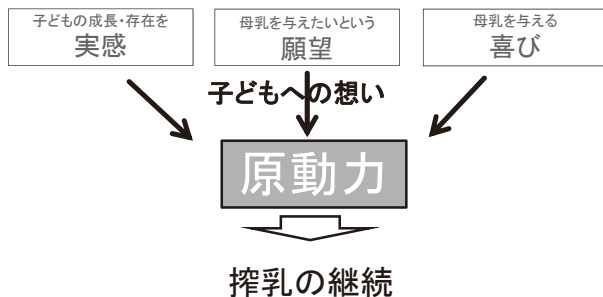
考察1 先行研究と本研究で共通する母親の思い



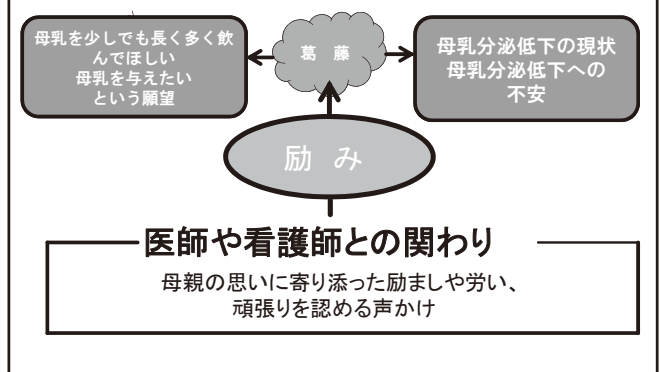
考察2

母子分離による孤独を感じながらも・・・

自宅では子どもの写真やビデオをみて



考察3



結論

- 母親は、子どもの疾患や出生時期が異なっても、搾乳を継続する中で共通する思いを抱いていた。
- 母親は母乳を子どもに与えたいという願望や母乳を子どもに与える喜びを感じ、原動力としていた。少しでも長く・多く母乳を飲んでほしいという思いと母乳分泌低下への不安から生じる葛藤や搾乳への辛さを感じていた。
- 母親の気持ちの変化に合わせた医師・看護師からの支援が励みと思っていた。

第57回日本母性衛生学会総会・学術集会

利益相反の開示

筆頭発表者名: 林遥香

演題発表に関連し、開示すべき利益相反関係にある企業などはありません。